明瀬美栄子

1922年（大正11年）7月22日石川県金沢市に生まれる。

1932年（10歳）東京音楽学校声楽科を出た平井美奈子がたまたま富山県の氷見高等女学校に音楽教師として赴任したことから、母親が美栄子に週2回自宅でレッスンを受けさせた。当初家にはオルガンしかなかったが、平井からピアニストになれる最後の年齢だからピアノを買ったらどうかと勧められ、母親は東京からピアノを取り寄せた。価格は1000円だった。500円で家が一軒建った時代なので近所の評判になった。ピアノの練習をしていると見物客が訪れ、そのたびに母親から民謡や軍歌を演奏させられて嫌な思いをした。3月にピアノを購入し5月には全校生徒の前でソナチネを暗譜で弾いた。平井は美栄子に伴奏させてローライなどの歌曲を歌った。平井は上流階級の言葉使いをしながら、教えた通り弾かないと手をピシッとたたくなど指導は非常に厳しく、美栄子はこの平井にピアノの基礎をみっちり教え込まれた。

1934年（12歳）氷見高等女学校に入学。平井が帰京した後任として音楽教師に着任した三木乗俊に師事。三木は師範学校の卒業で、ピアノとバイオリンを演奏したが腕前はたいしたことがなかった。ピアノも口で指導するだけで、自分で弾いて手本を示すことはできなかった。学校の行事で美栄子に伴奏させてバイオリンを演奏することもあった。美栄子は女学校の英語や数学の教師の娘にピアノを教えていたので勉強しなくてもいつも最高点をもらえた。

1936年（14歳）三木は自分にはこれ以上教えられないから東京で本格的に勉強したらどうかと勧めた。母親は妹の夫で東京府立第三商業学校の教師をしていた三宮宇彦に相談した。三ノ宮は同僚の国語教師で詩人の佐藤義美に事情を話した。佐藤は東京音楽学校を中退してフランスで学んだ新進気鋭のピアニスト高木東六を紹介した。母親と上京した美栄子は佐藤に伴われて高木東六と面会し、その門下に入ることになった。

1937年（15歳）東京板橋区の三宮家に下宿、第一東京市立高等女学校に通いながら高木のレッスンを受けた。同じ弟子の一人にバイオリニスト江藤俊哉の妹の玲子（当時9歳）がいて、その演奏技術の高さに圧倒された。高木は難しいフレーズは自分で弾いて見せるのでびっくりした。常に「歌う」ことを厳しく教え、ソナタの第2楽章などを単調に弾いていると、レッスンの順番を待っている他の弟子たちの方を向いて「退屈だねえ」と皮肉たっぷりに言った。

1941年（18歳）高木が宝塚歌劇団に指揮者として招かれると、下宿を神戸に移してレッスンを受け続けた。このころ高木の演奏がラジオから聞こえてこない日はなかった。

1943年（21歳）初リサイタル

1945年（23歳）高木はもう自分に教えることはない、ユダヤ系ピアニストのレオ・シロタに師事するよう勧めた。しかし当時シロタは軽井沢に軟禁されており、レッスンを受けるために軽井沢に通うのが大変なのと、母親からの仕送りの額が減ったので断念した。

(2014年9月雑談)